最優秀賞（神奈川県知事賞）

「善意のバトン」をつないで

横濱中華學院中学部　１年　小林（こばやし）　慈月（いつき）

電車の中。若い人たちが席を占め、彼らの前にはお年寄りたちがつり革につかまって立っている。若い人たちは目の前のお年寄りたちには見て見ぬふりで小さなスマホに夢中になっている。

こうした光景は誰しもが目にしたことがあるでしょう。僕も何度もありますが、日本に帰ってきたばかりの時はとても驚きました。なぜなら、帰国する前までこうした光景を見たことがなかったからです。

僕は１才から小学３年生まで台湾に住んでいました。僕の住んでいた台北も日本と同じように電車やバスを利用する人が多いです。台湾生活の中で、電車やバスでは譲る・譲られるのが当たり前でした。お年寄りやけがをした人、妊婦や小さい子どもに席を譲るのは当然の光景でした。ある時には、「這邊有空位喔！（こっちに空いている席があるよ！）」と遠くから呼んでくれたり、ベビーカーを運ぶためにバスから降りてきてくれたりした事もありました。

僕は母から小さい時の話をよく聞くのですが、「善意のバトン」と僕たちが呼んでいる話が好きです。ある日、ベビーカーの僕と母は、急な大雨に遭い、道ばたでずぶ濡れになりながらタクシーを待っていました。しかし、どのタクシーにも人が乗っていて、なかなか捕まえることができません。するとその時、客を乗せた１台のタクシーが僕たちの前に止まりました。そうしたら、運転手の人が窓を開けて、「對不起，現在車裡有人所以我不能讓你們搭，但請用這個等計程車！（ごめんなさい、今人が乗っているから乗せてあげられないんだけど、これを使ってタクシーを待っていてください！）」と言って、自分の折りたたみ傘を母に渡し、再び走り去って行ったのです。その後、母と僕は傘をさしながらタクシーを待って、無事家に辿り着くことができました。とても感動した母は、その傘を自分のものにはせず、「善意のバトン」として、傘がなくて困っている人に渡したそうです。

台湾の人たちは、どんな時でも、誰に対しても、気軽に声を掛け、関心を持ち、自分から進んで譲ってくれたり、助けてくれたりしようとします。他の人のことを気遣い、思いやることが当然だと考える、こうした台湾の人たちの心を僕は素敵だと思うし、僕自身もその思いやりの心を常に持っていたいと思います。

ですが、思いやりの心を持って、周りの人に心配りをしても、気持ちよくつながっていないこともあると思うようになりました。

ある時友人が、「この間電車で勇気を出して席を譲ろうとしたけど、『いいです』と言われて、どうすればいいか分からなくて恥ずかしかった。もうあんな恥ずかしい思いをしたくないから、自分から譲るのは迷うな。」と言っていたのです。

僕は思いやりを受け取る側の人の心のあり方も関係するのではないかと思います。僕も以前電車で席を譲ろうとした時に、「あ、いいです。」とあっさり言われてしまいました。もし、この時にこんな風に返されたらどうでしょう。「次で降りるから大丈夫よ。ありがとうね。」と。たとえ必要がなかったとしても、感謝の気持ち「ありがとう」を一言返すだけで、お互いにほっこりしますし、譲ろうとした人も「また今度も声を掛けよう」と思うようになれます。これもまた、一つの「思いやり」です。

思いやりの心を持ち、お互いのことを考えて、受け入れる。その心があれば、譲り合ったり、助け合ったりすることができ、社会で協力し、つながり合うことができるのです。

家庭の中でも、地域でもどこでも、自分から進んで行動し、また相手に感謝の心を持つ。一人一人が他人を思いやり、「善意のバトン」をつなげば、社会ともっと深くつながるのではないでしょうか。バトンは、持つ人がつなげようと、受け取る人がつながろうと思うことで、初めて成立するのです。僕は世界中の人たちと、「善意のバトン」リレーを続けていきたいです。このリレーの先には平和な社会がきっと待っているでしょう。